

2015年度 活動報告



特定非営利活動法人
パルシック

はじめに	1
パルシックの民際協力とフェアトレード	2
シリア	4
1 シリアの状況	4
2 シリア難民支援事業	5
パレスチナ	6
1 パレスチナの状況	6
2 ガザ支援事業	7
スリランカ	8
1 スリランカの状況：内部抗争から和解と協力へ	8
2 ムライティブ県コミュニティ復興支援	9
3 ジャフナ養殖事業	9
4 サリー・リサイクル事業	10
5 デニヤヤ有機紅茶転換事業	11
東ティモール	12
1 東ティモールの状況	13
2 コーヒー事業——念願の加工場の完成	13
3 農村女性による経済活動支援	13
4 循環型農業事業から水事業へ	15
マレーシア	16
1 PIFWAの活動	16
2 PIFWANITAの活動	16
3 学校プログラム	16
東日本大震災復興支援	17
北上復興応援隊の活動	17
フェアトレード	18
広報	19
人と暮らしに出会う旅	21

はじめに

2014年度にパレスチナ、ガザ地区でイスラエルの空爆によって破壊された、人びとの生活再建を開始したの
に続けて、2015年にはシリア難民の支援を新たに開始
しました。やや身に余るという自覚はありましたが、シ
リア国内外で複数の大国が干渉した結果、人口の半数が
難民となっており、国外避難民は439万人にも及んでい
る状況を看過することができないという思いでした。シ
リア国内は邦人の入国が禁止されているため、もっとも
避難民の数が多く、かつ国境を締め切っていないために
増え続けているトルコで事業を開始することにしました。
シリア国境に近いトルコの南部、シャンルウルファ市に
事務所を開いて事業を開始したのは10月1日でしたが、
その直前の9月2日にトルコからギリシャを経てヨーロ
ッパに亡命しようとしてボートが転覆し、3歳の少年の
遺体が発見されたことをきっかけに、ドイツのメルケル
首相が難民受け入れを宣言し、日本も難民政策を問われ
る事態となりました。新しい事業を開始したことで新し
い人びととの出会いもあり、パルシックはこれまであま
り知見のなかったトルコやシリアをめぐる状況について
も多くのことを学んでいます。

パルシックが東ティモールに初めて駆けつけたのも、
当時の国民総数60万人のうちの20万人が国外避難民に
させられたという状況（1999年）に押された結果でし
たが、それからすでに16年が経とうとしています。ス
リランカでも内戦が終了した直後（2009年）は国内避
難民へ食糧提供を行いました。それからすでに6年が
経過しました。2002年の停戦合意に突き動かされてス
リランカの事業を開始してからも10年余が経過し、自
立化への努力を開始しています。

新しい事業を始めることよりも、事業をたたんでいく
ことの方が難しいことを実感しています。東ティモール
に関しては、依然として農村部の貧困、子どもたちの教
育、産業が乏しいために若者の就業機会が限られている
ことなど問題は山積で、今後まだ10年間くらいの事業
継続が必要と考えています。が、同時に東ティモールの
デイリにコーヒーの二次加工場を建設し、コーヒーの加
工を中心とした事業で現地法人のPTC (People's Trade
Company)社が自立的に運営できるための基礎ができた
ました。

スリランカ北部、とくにジャフナに関しては内戦の復
興という段階は終わりつつあり、地域の女性たち、さら
には現地のスタッフが社会的企業として自立することを
支えつつあと2-3年で撤収するという方向で考えていま
す。2015年度末にジャフナのゲストハウス KAIS (KAI
はタミル語で手の意) がようやく黒字になったことがそ
のための第一歩です。

マレーシアでも6年間の支援を経て、日本の学生たち
がマングローブ植林の意味やマレーシア社会、文化、言
語を学ぶ場へと移行させ、沿岸小漁民や漁村の女性たち
との交流を持続的に行う基礎を築こうとしています。

パルシックは、こうして一定期間の支援事業を経て、
現地の人びととパルシック現地スタッフが自立的に社会
的企業を運営していかれるようにすることを目指してい
ます。が、そのためにはパルシックとして事業運営のノ
ウハウを含めてまだまだ多くのことを学んでいかねばな
らないと感じています。引き続きご支援をよろしくお願
いします。

パルシック理事 井上 禮子 永田 洋子
清水 研 中村 尚司
鈴木 直喜 穂坂 光彦

パルシックの民際協力とフェアトレード

パルシックの民際協力活動は、外国の占領や侵略、紛争、自然災害によって自立的な発展を阻まれた人びとが、暮らしを取り戻すことへの支援を重視しています。活動を通じてできあがった商品は、フェアトレード商品として販売し、生産者の暮らしを守ります。



トルコ

●シリア難民への緊急人道支援
戦禍を逃れシリアからトルコに避難した人びとへ食糧・生活用品の配布



スリランカ

- ムライティブ県での内戦復興支援
内戦で激戦場となった地域に帰還した人びとのコミュニティ再建と漁業の再開を支援
- サリー・リサイクル支援
内戦や津波で夫を失った北部の女性たちによる古着サリーのリメイク・販売を支援
- ジャフナ県での養殖支援
持続可能な漁業をめざし、海藻、カニ、ナマコの養殖を導入
- 南部デニヤヤでの紅茶有機転換事業
小規模紅茶農家の有機栽培転換を支援、できあがった紅茶をフェアトレード商品として販売



パレスチナ

●ガザ地区緊急人道支援
戦争で被災した人びとへの食糧配布、農家の生活再建、子どもの心のケア



東日本大震災復興支援 (宮城県石巻市北上町)

- 北上地区復興応援隊事業
子ども支援、地域のイベント・住宅
移転・まちづくり支援、かわら版発行



東京

- フェアトレード事業
コーヒー、紅茶など、国際協力活動
を通じてできた生産者たちの商品を、
日本の消費者へつなぐ



マレーシア

- 漁民によるマングローブ植林活動
小漁民グループPIFWAによる失われた
マングローブ林の再生を支援
- 食品加工支援
漁村女性グループPIFWANITAによるマング
ローブを使った食品づくりを支援



東ティモール

- コーヒー生産者支援
コーヒー農家を技術面で支援し、
フェアトレードで市場とつなぐ
- 農村女性の食品加工支援
貧しい農村で女性たちによる地元資源を
活用した製品づくり、販売支援
- 水の供給支援
山間部の農村に、パイプラインや
ため池などの水供給システムを構築

1 シリアの状況



洗濯物をテントで乾かす家族

国連決議 2254号

2015年12月18日に国連にてシリア紛争解決に向けたロードマップ国連決議第2254号が全会一致で採択され、今後の行動計画として主に以下の内容が合意された。

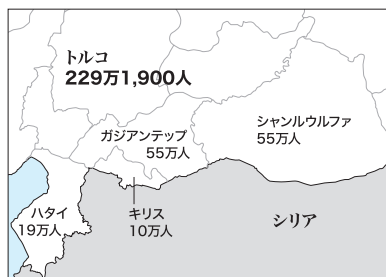
- 停戦を要請し、政治移行プロセスの話し合いを2016年1月初めより開始
- イスラム国 (ISIL)、アル・ヌスラ戦線等のテログループに対して、今後もテロ行為の予防及び抑圧を継続
- 2016年1月18日までに、パン・ギムン国連事務総長が今後の対話に向けた信頼醸成を構築するためのレポートを提出
- 6ヶ月以内に、信頼に足る包摂的で非宗派的な政府の樹立及び新憲法の起草
- 18ヶ月以内に、新憲法枠内での自由と公正な選挙の実施
- 政治移行プロセスはシリア人主導で実施

日本における難民申請と難民認定された人の数

年	申請総数	難民認定
2013	3,260	6人
2014	5,000	11人
2015	7,586	27人

(出典) 法務省入国管理局統計

トルコ南部に滞在するシリア難民数 (2015年下半期)



パルシックは2015年10月からシリア難民支援を開始しました。きっかけは3月にパレスチナ事業を担当するスタッフからシリア難民の悲惨な現状を聞いたことでした。それでまず調査を開始し、その時点でシリアとの国境を開いていたトルコに逃れるシリア難民が急増していることを知り、トルコ現地での調査を経て、10月にトルコの南部シリア国境に近いシャンルウルファに事務所を開きました。パルシックは東ティモールでも1999年に、スリランカでも2009年に緊急に助けを必要とする難民の支援から事業を開始しましたが、いずれも国内避難民で、海外に逃れている難民支援を行うのは初めてです。難民たちはトルコという外国の地で、その地域の人たちの助けを得ながら生きているのです。従って私たちはシリア難民の支援をトルコ社会のなかで、その制度や文化を尊重しながら実施しなければなりません。

パルシックが事業開始準備をしていた9月2日には、3歳のシリア難民のアイラン君の遺体がトルコの海岸に打ち寄せられ、その写真は世界中にシリア難民の問題を意識させました。シリア難民の多くが「自由と安心」をヨーロッパに求めて、トルコの港町イズミールから小型船に乗ってEUの一角、ギリシャに上陸し、そこからヨーロッパ各国を目指すのです。ドイツのメルケル首相は、積極的に移民を受け入れる宣言をし、欧米各国がこれに続く動きを見せました。すでに100万人を超すシリア難民がヨーロッパに向かっています。シリア難民支援が大きなテーマとなった9月の国連総会で、記者たちに質問された安倍首相は受け入れを言明せず、海外メディアから「国内問題にしか対応しない」と言った批判を受けました。これに対して例えばマレーシアは、今後3年間で3,000人のシリア難民を受け入れると表明して喝采をあげました（現実にはマレーシアで難民の生活を支援する体制がどれだけ築かれるかは疑問ですが）。2011年にシリア危機が始まって以来、日本で難民申請を行ったシリア人の数は60名を超えていますが、その中で認められたのは1家族3名だけです。この機会にこうした状況自体を変えていくこともまた日本の市民の課題だと考えています。

他方で、昨年10月にはロシア空軍がシリア政府支援のためイスラム国 (ISIL) に対し空爆を開始し、トルコの難民数は一層増えています。そして12月には国際世論に押されて、シリアの紛争解決を目指す国連決議2,254号が採択されました。その後、米ロを中心とする大国が主導する形で停戦に向けた話し合いが進められ、2016年2月27日に一時停戦の合意が発効しました。今後、和平実現に向けた話し合いが進められますが、シリア国内ではアサド政権と反体制派の間の隔たりは大きく、両陣営がどれだけ歩み寄れるか、いまだ未知数です。停戦が実現したとはいえ、先が見えない中でシリア難民が少しでも安心できるような支援を続ける所存です。

2 シリア難民支援事業

2015年10月よりトルコ南部シャンルウルファ県ハラ市にてシリア難民支援を開始し、トルコのイスタンブールに本部を置く Support to Life (サポート・トゥ・ライフ) をパートナー団体とし、食糧及び衛生品の配給と、越冬に必要な

な生活用品の配布を行いました。

【食糧・衛生品支援】

これまでいかなる支援も届いていなかったハラン市内及び郊外を支援対象地としました。商店が立ち並ぶハラン市内では、契約商店で食糧や衛生品が自由に購入できる電子バウチャーを配布しました。バウチャーは毎月定額がチャージされ、食糧や衛生用品であれば各世帯が自由に選んで購入できます。規定の物資が配給されるのではなく家族で相談しながら購入できることで、シリアから逃れてきた人びとは、束の間の買い物の時間を楽しむことができます。他方、田畑に囲まれ周辺に商店がないハラン市郊外においては、1ヶ月分の食糧バスケットを配布しました。

配布内容

ハラン市内

【電子バウチャー】 食糧購入用に1人45リラ（約1,800円）/月
衛生用品購入用に1世帯40リラ（約1,600円）/月

【対象者】 シリア難民207世帯（1,106人）

ハラン市郊外

【食糧バスケット】 約1ヶ月分の食糧（米、パスタ、ブルゴル米、小麦粉、イースト、マーガリン、調理油、乾燥豆、乾燥ヒヨコ豆、赤レンティル豆、緑レンティル豆、黒オリーブ、トマトペースト、チリペースト、タヒニ、ホモス粉、ハルバ、砂糖、塩、紅茶）

【対象者】 郊外78村のシリア難民1,500世帯（8,100人）

【越冬支援】

冬になるとトルコ南部は厳しい寒さが続き、朝晩は氷点下となり、雪も降り積もります。しかし、ハラン市郊外で暮らすシリア難民世帯の約30%は、屋外のテントでの生活を余儀なくされています。そこで、シリア人家族が少しでも厳しい寒さを和らげられるよう、防寒用の衣類を購入できる電子バウチャーや防寒用品の配布を実施しました。

配布内容

ハラン市内

【配布内容】 電気ヒーター200台

【対象者】 200世帯（1,106人）

ハラン市郊外

【配布内容】 防寒用衣類の購入用バウチャー60リラ（約2,400円）、電気ヒーター400台、毛布1,200枚、マットレス1,800枚

【対象者】 郊外20村の400世帯（2,158人）

（この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）

シリア難民の子どもたち

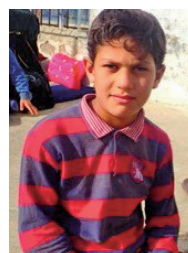


サーラちゃん（5歳）

（お母さんより）配給された電子バウチャーを使って買い物にきました。娘は毎月の買い物を家族のなかで一番楽しみにしています。このお店にやってくると自分から商品棚へ走っていき、お気に入りのソーセージをとってきます。今の生活では娘にとって楽しいことをあまりさせてあげられませんが、家族での買い物はとても喜んでます。

オサイくん（11歳）

1年前にトルコにきました。シリアでは学校に通っていたけれど、ここには通える学校がありません。毎日きょうだいと家の周りで遊んで過ごしていて、トルコ人の友だちもいません。大きくなったらお医者さんになりたいし、今はとにかく学校に通って勉強したいです。



電子バウチャーで買い物をする少年



配布された食糧を持ち帰る少年



電気ヒーターの配布を待つ少年



家の周辺で遊ぶシリア人の子どもたち



ハラン市の村で暮らす幼い姉妹



破壊されたまま修復が始められていないガザの住宅

1 パレスチナの状況

2012年、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）は衝撃的な報告を発表しました。「このままの経済状況が続けば、2020年までにガザは人が住めなくなる」というものです。そして2014年夏のガザ侵攻から1年半経つ現在、国連は「もはや人が住めなくなるまでに5年もかからない」との見解をまとめました。ガザ地区の復興は大幅に遅れ、いまだに9万8千世帯が半壊した家や一時シェルターなどでの避難生活を余儀なくされています。人道的な限界を超えた環境が人びとの日々の営みに重くのしかかっています。

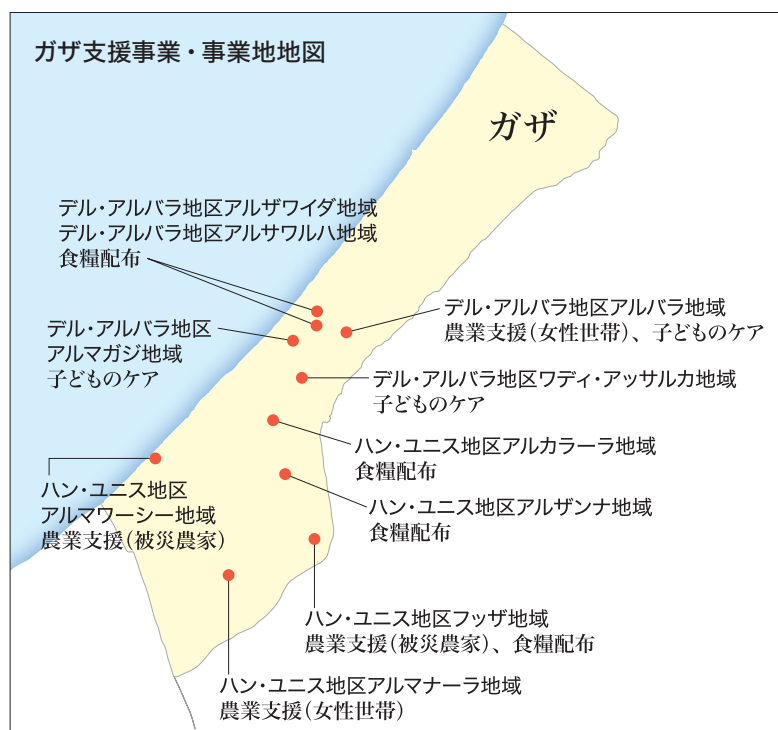
破壊されたインフラや家屋の再建、農業を含む主要産業の生産回復が遅々として進まない原因は、国際社会からの支援の滞りによるものだけではありません。2007年以降8年目に入ったイスラエルによるガザ地区の封鎖が、あらゆる物や人の出入りを厳しく制限しています。中でも、復興に必要な建築資材は「武器に転用可能」として規制され、2016年1月時点で、再建に必要と見積もられている資材の1割も入ってきていません。支柱とする材料が入らないために、全壊した農業用温室の再建は1件も着手されておらず、農地の修復も3割に留まります。農業セクターの復興の遅れは、地元市場への供給不足、食品価格の高騰につながり、人びとの家計を圧迫しています。生活に必要なライフラインもまた危機的状況にあります。現在のガザ地区における電気供給は1日4-8時間、地下水の9割は飲めなくなっていると言われます。人びとは電気のある時間帯に家事をまとめて済ますなど、創意工夫を凝らし何とか日々を乗りきっています。

2015年、ガザ地区の1人あたりのGDPは20年前の水準から72%も縮小しました。現在8割の人びとが国連やNGOなどからの食糧支援を受けて生活し、失業率は世界最高レベルの4割に達しています。ガザの自立的な経済復興のため、ガザの主要産業である農業再建や雇用創出につながる支援が求められています。

ガザの復興状況

建物・住居	
種別	修復完了
全壊	0%
大規模半壊	12%
半壊	1%
農業資産	
種別	修復完了
全壊した温室	0%
半壊した温室	65%
野菜畑	27%
果樹園	4%
羊、牛の畜産農場	35%
井戸	16%
心理社会面	
トラウマを抱え、継続的な心理社会的サポートが必要な子どもとその保護者の数	450,184人

出典：“HUMANITARIAN NEEDS OVERVIEW 2016 OCCUPIED PALESTINIAN TERRITORY”, OCHA, November 2015



2 ガザ支援事業

昨年度に引き続いて、2014年のガザ侵攻で被災したガザ地区中部と南部の農家に農業生産の回復を支えるための支援と、トラウマを抱えた子どもへの心理的なケアを実施しました。

【農業支援・食糧配布】

前年の緊急支援で実施した食糧配布を拡大する形で、農業支援と食糧配布を行いました。ガザ中部デル・アルバラ地区及び南部ハン・ユニス地区において、被災した小規模農家200世帯に農機具や肥料、野菜の苗を配布して農業再開を支援しました。その後、それぞれの農家で収穫した野菜の一部を買い上げて食糧バスケットを作り、生鮮食品の価格高騰に苦しむ地域の貧困世帯に配布しました。これまでに2,559世帯が野菜や鶏、卵などからなる生鮮食品のバスケットを受け取っています。

また、脆弱な女性世帯81世帯を対象に、ウサギなどガザで一般的に食されている家畜の配布及び飼育方法の指導を行いました。生まれたウサギは自家消費のほか、市場や地域で販売することで、最大月3万円程度の収入を得ています。今後も、小規模農家及び女性世帯の支援を、規模を拡大して続けていく予定です。

【子どもの心理】

中部デル・アルバラ地区において、戦争のトラウマに苦しむ子どもたち450名に心理社会的ケアを提供しました。55日間にわたる空爆・地上侵攻を目の当たりにしたガザの子どもたちの多くが、暗闇や大きな音が怖い、悪夢を見るといった症状を訴えています。こうした子どもたちを対象に演劇やアートを用いたワークショップを実施した結果、97%の子どもたちに症状の緩和が見られました。

(この事業は、ジャパン・プラットフォームの助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)



食糧配布に並ぶ人びと



苗からじゃがいもを育てた農家



子どもたちの成果発表会のようす

ガザの人々の声



ルウルウ・バシルさん

デル・アルバラ地区東デル・アルバラ地域の農村地帯に住むルウルウ・バシルさんは、4月下旬パルシックの食用動物配布を受けて、ウサギの飼育を開始しました。10月末、スタッフがその後の様子を確認しに訪ねてみると、ルウルウさんは近所でも評判が立つくらい人気のウサギ農家になっていました。「市場には出さずに家で売っています。近所の人だけではなく、最近ではウワサを聞いてわざわざ来てくれる人もいますよ」とにっこり。今では月2万3000円ほどを売り上げています。ウサギたちがあまりに健康で丸々太っているので、現地スタッフも帰りがけに思わず5羽のウサギを購入しました。



ムハンマド・エメシュさん

食糧配布の当日、「鶏は入っていますか？」と何度もスタッフに確認したムハンマドさん。「2カ月鶏肉を食べていません。息子が失業してから生活は格段に苦しくなり、戦争がそれに拍車をかけました。持っていたオリーブの木は全滅、家畜も失いました」。現在ガザでは電気やガスの供給が限られ、料理すら容易ではありません。それでもこの日、彼の表情は晴れやかでした。「今日は新鮮野菜のサラダが食べられます。子どもたちの嫌いなピーマンは除きますけどね」。

1 スリランカの状況：内部抗争から和解と協力へ



新聞記事に掲載されたシリセーナ大統領



2015年1月の大統領選挙でのポスター合戦の様子



内戦後開発が進むコロombo



内戦後活気が出た北部ジャフナの市街地



中村尚司理事

稀にみる内部抗争の社会である。12世紀以降、社会のあらゆる分野で、内部抗争を重ねてきた。欧米の植民地支配を受けた地域のなかでも、このように内部抗争に偏向する社会は珍しい。2015年の政権交代を契機に、内部抗争から和解に向かう兆しが見えてきた。その兆しが相互協力に向かって定着するかどうか、重大な転機である。過度に統合を強調する日本近代からの観察者としては、少なからぬ不安と期待を禁じ得ない。

小さな島国であるが、多くの人工的な貯水池が存在する。溜池と同じくらい寺院が分立する。池と寺の数と変わらぬ村がある。12世紀までは池と寺と村の共同事業が、人びとの暮らしを支えてきた。その後、池はネットワークを失い、寺は見せかけの戒律に閉じこもり、村はその境界さえ失った。やがて池も寺も村も形骸化し、三者の協力関係は失われた。住民は個別的な利害を求めて離合集散し、内部抗争に向かった。

外部勢力と戦うことはない。敵は常に内部にいる。静ころない日常である。明朝の大遠征隊が来航し、シンハラ王を南京に連行した時、シンハラ貴族は誰も戦おうとせず、内部抗争を重ねていた。ポルトガル艦隊を受け入れ、キリスト教徒に改宗する者と、仏教、ヒンドゥ教及びイスラム教に留まる住民とが抗争した。オランダ東インド会社とポルトガル植民地政府が戦っても、シンハラ王国やタミル王国では、内部抗争の方が忙しかった。英国が植民地化を図った時も、キャンディ王国内部の抗争を利用したに過ぎない。

インドやビルマのような反植民地闘争はなく、マウントバッテンを総司令官とするイギリス東南アジア軍の基地を提供したくらいであり、反英親日の国ではない。LTTEもプラバーカランとカルナなどの内部抗争が続き、JVP（人民解放戦線）もソーマワンサとヴィーラワンサの内部抗争が運動を解体させている。政権与党の委員長と書記長が大統領を争った2015年の選挙は、その頂点である。

次の時代に、当事者間の和解と協力が可能になるだろうか。その意味で、従来のスリランカ社会に存在しなかった NPC (National Peace Council) や CPA (Centre for Policy Alternatives) などの市民団体が、内部抗争から和解と協力への転換を図る重要な役割を演じていることは、注目に値する。

(中村尚司 パルシック理事)



サラワナムトゥツ氏

サラワナムトゥツ氏報告会

2015年のスリランカ：政局、人権、民族融和 —スリランカ市民団体代表による報告—

2015年5月15日にスリランカの代表的なアドボカシー NGO、CPAの代表を務めるサラワナムトゥツ氏を招いて、新政権誕生に至った経緯と新政権の課題について考える報告会を開催しました。同氏が報告のなかで強調したのは、「戦争は終わったが紛争はまだ続いている」という点です。民主的なガバナンスのための環境整備と、それに基づいた恒久的な平和を実現することは容易ではなく、これらを可能にするためには、新政権が積極的に市民社会と協議するとともに、日本を含めた国際社会が今後の動きを見守り、精査していくことが重要であると、参加者に訴えました。



報告に熱心に耳を傾ける参加者

2 ムライティブ県コミュニティ復興支援

2013年9月から開始したムライティブ県でのコミュニティ復興支援事業の開始から2年半が経ちました。事業1年目には3村でコミュニティホールを建設し、2年目にはコミュニティホールでの各種教室、会議の実施とセリ場の建設、および次年度での養殖事業の準備を行いました。そして最終年の3年目には、自然環境に配慮した養殖の導入に取り組んでいます。

【セリ場の建設】

2015年度のムライティブ県におけるコミュニティ復興支援事業では、マリタイムパトゥ郡の3村でせり場及び漁協休憩所の建設・改築を主に行いました。

せり場は、今回新たにせりが導入されたカルナドゥカーニ村と以前から自主的にせりが行われていたカラパドゥ村で建設しました。漁協が活発なカルナドゥカーニ村では、周辺地域の漁獲物販売の拠点としてせり場と同時に漁協休憩所も建設しました。せり場完成前の昨年4月から試験的にせりを始めましたが、買い付け業者によって価格が決められてしまう現状があり、本来のせりからは程遠いものとなっています。カルナドゥカーニ村の漁協長のジョセフさんは、「せりの仕組みは理解しているが、新しいことを始めるのは容易なことではない。時間をかけて、せりを本格化してゆきたい」と話していました。一方、カラパドゥ村のせり場では、本来のせりが導入されており、毎朝活気のあるせり場となっています。カラパドゥ村の漁協長ダルマラーサさんは、「内戦が終わり、我々は漁協の仲間と力を合わせて中古のボートやエンジン、網などを入手し、支援に頼らず真っ先に漁業を再開した。しかし、逆にどこからも支援を受けられず苦労した。今回、せり場建設の支援を受けて村が活性化し、漁協の組合員の生活の向上につながると思うと、非常にうれしい。心から感謝している」と述べていました。

【養殖の準備】

せり場以外には、今後予定されている養殖事業での活用を視野に入れ、ワトゥワハル村で漁協休憩場の改築を行いました。また、日本人専門家による調査結果を踏まえて、魚種も含めた事業候補地を選定しました。2016年度では、引き続き漁協の皆さんと話し合いを重ねながら、せりの本格導入、せり場の更なる活性化、そしてその先にある漁民の生活向上を目指すと同時に、水産資源の枯渇に備えた持続可能な漁業を視野に入れ、簡易的な養殖・蓄養を計画しており、漁民にとって新たな試みが始まろうとしています。

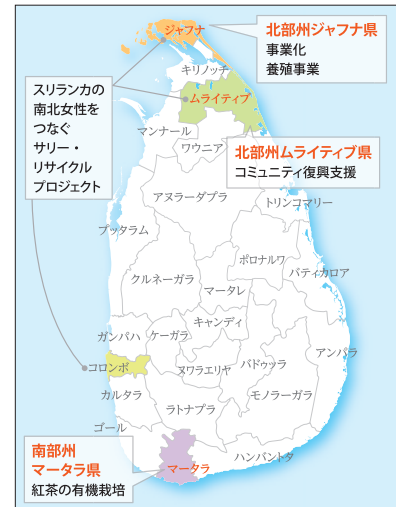
(ムライティブ事務所 飯田彰)

(この事業は、日本 NGO 連携無償資金協力の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

3 ジャフナ養殖事業

ジャフナでの養殖導入事業を始めて、2年半が経とうとしています。養殖魚種をナマコと海藻、カニの蓄養の3種に決めて取り組んできましたが、この間、養殖というスリランカ北部での新しい活動に漁師さんとともに試行錯誤してきました。特に、北部の漁民にあまり知られていない海藻の養殖は、モンスーンや塩分濃度の影響で何度もだめになり、そのたびに参加する漁師さんとともに落胆してきました。それでも、篤農家のように努力を惜しまない漁師さんたち

スリランカの事業地



せり場でのせりのようす

ムライティブ県マリタイムパトゥ郡 パルシック事業地



ジャフナ県養殖事業地





海藻養殖に取り組むジャフナ県の漁師

が管理してきた海藻は、2016年初、順調に生育し予想以上の収穫が得られそうです。今後、海藻養殖に関心を持つ漁民が地域に増えていくかもしれません。

(ジャフナ事務所 アジャンタ)

(この事業は、三井物産環境基金の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。)

4 サリー・リサイクル事業

サリー・リサイクル事業参加農村



縫製指導研修に参加するムライティブ県の女性たち



縫製した製品を見せる女性

2013年からジャフナ県で開始したサリー・リサイクル事業は、2015年4月からは JICA 草の根技術協力事業パートナー型の支援を得て、事業地を隣県のムライティブ県にも拡大しました。パルシックが2012年から事業を展開している同県マリタイムパットゥ郡の3村から、新たに約50名の女性が参加し、現在は計75名の女性が縫製に参加しています。スリランカ各地で回収した古着のサリーを、衣類、ポーチ・バッグやクッションカバーなどの雑貨にリメイクし、その販売によって、縫製に参加する女性たちの収入向上を支えます。昨年プロの刺繍作家を招いて行った研修で女性たちが学んだデザインなど、新商品もラインナップに加わりました。今年度は、出来上がった商品の販売にも力を入れ、コロンボで毎週末開かれているイベント「グッドマーケット」に隔週で参加したほか、企業や役所、国連機関事務所での販売会、各種バザーへの参加、通販サイトを利用したインターネット販売、衣類雑貨店・土産物店・ホテルなどへの営業を展開し、販売網の拡大に努めました。イベントに出店することでサリーの寄付者及び事業内容に共感して下さる人が増えていることを実感できましたが、一方で、継続して商品を置いてもらえる店舗との契約は数件に留まっており、安定した販路の確保が課題です。

古着サリーの収集については、企業、学校へサリー寄付依頼レターを送付したほか、事業内容が英字紙3紙で延べ5回、タミル紙3紙で延べ4回紹介された結果、Singer、John Keells、Union Assuranceといったスリランカ国内大手の企業からの寄付も含め、全国から1年間で約2,500枚のサリーが集まりました。広報活動としては、商品のブランド“Sari Connection”のフェイスブックサイトの立ち上げ、商品カタログの制作なども行い、各媒体で事業内容を広めています。2016年度は、女性たちの縫製技術の向上に加え、継続して商品を提供できる店舗数を増やすことを中心に活動します。(スリランカ事務所 伊藤文)

(この事業は、JICA 草の根技術協力事業パートナー型の支援と皆さまからのご寄付で実施しています。)

サリー事業に参加する女性の声

ムライティブ県コクライ村
タンガルピさん (写真右)



サリー事業に参加するまでは、裁縫はほとんどできませんでしたが、6ヶ月の研修を経て、ミシンと手縫いの両方ができるようになりました。主にスカートとテーブルマットを作っています。内戦で夫、3人の兄妹を失い、今は12歳になる息子を両親とともに育てています。家族の収入は両親が営む雑貨店の売上のみで、息子への教育費が十分ではありません。サリー事業に参加した際、ここから得られる収入を息子の教育費に使おうと決め、今は息子を塾に通わせることができました。この機会にさらに多くの技術を学び、将来は村で縫製店を営みたいと考えるようになりました。サリー事業に参加できることをとても嬉しく思っています。

5 デニヤヤ有機紅茶転換事業

スリランカ南部デニヤヤでの有機紅茶転換事業は、開始から5年が経過し、年々参加農家が増えるとともに有機転換のための体制が整いつつあります。

今年度は、2014年度に建設したコンポスト・センターに併設するかたちでバイオガス・プラントを建設しました。土壌改善に必要な固形のコンポストに加えて、収穫量の増加に比較的即効性のあるメタン発酵消化液を得るのが目的です。計画では7月には建設終了、運用開始を予定していましたが、バイオガス・プラント建設技師との調整に手間取り、3か月ほど遅れて11月初旬に建設完了、12月に消化液の収集が可能となりました。1月末現在、デニヤヤ地域において詳細な成長記録をつけてもらっているところです。同時に政府紅茶研究所に成分検査を依頼しています。これらの結果を参考にして、2月にはエクサ*のメンバーへ消化液の販売を開始する予定です。なお、バイオガス・プラントから得られるメタンガスは、12月から2月の気温の低い時期の夜間にコンポスト・センターにいる牛のための暖房として活用する予定です。

2016年1月末に39世帯47圃場（複数の圃場を転換した農家があります）の有機転換検査を終えました。この検査の結果、問題がなければいよいよ有機紅茶として認められます（有機JAS認証）。農家自身による農業記録もようやく定着し、スタッフは毎月、記録されたものを確認するだけでよくなりました。他の圃場も来年以降、徐々に認証を受けていく予定です。

今年が一番の課題であった有機紅茶共同栽培グループ、エクサの自立に関しては、現地スタッフを中心として政府組合開発局への登録準備を開始しました。組合開発局への登録は2016年7月に完了する予定です。実際の運営面、経済面の自立化は2016年度の課題として引き続き取り組んでいきます。

（デニヤヤ事務所 高橋知里）

*エクサは、Eksath Kabonikka Tea Waga karawange Sangamaya = United Organic Tea Farmers' Associationの略です。

（この事業は、ゆうちょ財団及び日本国際協力財団の助成と皆さまからのご寄付で実施しています。）



バイオガス・プラントとコンポスト・センターの様子



スタッフによる有機農業栽培記録のチェック

紅茶農家の声

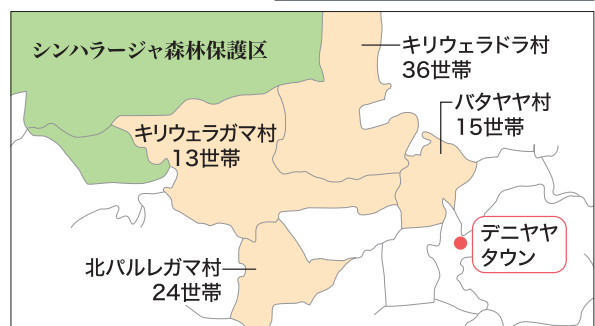
チンタカさん



2012年度からの参加で、若手で積極的なメンバーの一人です。今年から幼稚園に通いだした可愛い双子のお父さんです。有機転換を始めた当初は、茶木を植え替えたばかりの圃場から挑戦しましたが、化学肥料無しではうまく茶木が育たず、苗を無駄にしてしまいました。

そこで、専門家に相談して化学肥料を与えて茶木として育てた後に有機転換することにしました。同時に茶木がすでに育っていた別の圃場で有機転換を進め、現在はこの圃場から出荷しています。また、昨年末に新しく苗を植えた圃場で、有機堆肥に加えて2015年度に建設したバイオガス・プラントからのメタン発酵消化液を活用して、もう一度、化学肥料無しで苗から有機栽培で挑戦することにしました。

デニヤヤ有機紅茶事業
事業地と参加世帯数
(2016年1月現在)





フレテリン創設40周年記念バナーが掲げられたディリ市内



買い物客でにぎわうティモール・プラザ



東ティモールの農村風景

1 東ティモールの状況

2月の内閣改造で幕を開けた東ティモールの2015年は、東ティモール民族解放軍（フレテリン）創設40周年記念（8月20日）、ポルトガル宣教師上陸500周年記念（11月28日）と、記念行事が目白押しでした。特に11月のポルトガル上陸500周年記念は、上陸地オエクシでの開催となり、オエクシ経済特区開発の進捗と合わせて注目され、外国から賓客も招いて華々しく開催されました。

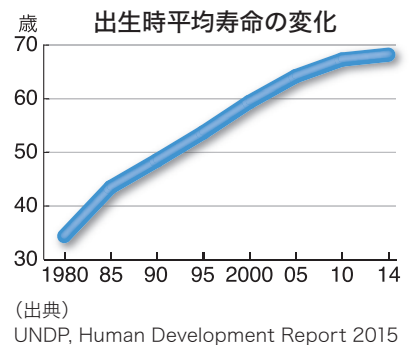
しかしながら、2015年がきな臭い年であったことは記憶に留めておかねばなりません。国民から絶大な信頼を集めるシャナナの首相辞任、内閣改造の背景にあったと思われる治安問題は、8月8日、首謀者である「マウベレ革命評議会（Konselho Revolusaun Maubere：KRM）」のマウク・モルック氏が、3名の護衛と共にバウカウ県の山中を逃走中、射殺されるという結末を迎えました。年初から組織されていた国家警察と国防軍の合同作戦は、KRMとの小競り合いを繰り返しながらもマウク・モルック投降という結果を導き出せませんでした。

独立後、シャナナへの批判を繰り返して射殺されたケースはこれで2件目になります。紛争後の独立国で、カリスマ的指導者が国家の統一を図るためには致し方ない道筋なのでしょうか。フレテリン創設40周年を祝うバナーには、元フレテリン兵士の写真がふんだんに使われました。その中にはマウク・モルックの実兄の顔写真もありました。弟の死からわずか2週間後の40周年記念行事を、このお兄さんはどのような心境で迎えたのでしょうか。

オエクシ経済特区代表に野党フレテリンのマリ・アルカティリ書記長が就任し、野党不在の国会運営が続いています。国内の物価は上がり切った状態で落ち着き、ハンバーガーチェーン店はディリ市内に4店舗を構え、5.95ドルのバーガーセットを家族連れで食べにくるティモール人で賑わいます。洒落た喫茶店やパン屋に集うのも外国人だけではなくなりました。農村部の人びとの暮らしはますます見えにくくなってきています。

東ティモールの開発と国内格差について

東ティモールの出生時平均寿命は、1980年から2014年の間に33.8歳伸びており、同国の人間開発指標は順調に推移しています。他方、東ティモールを代表するアドボカシー NGO の Laohamtuk は、現在進められている開発政策が国内の格差を拡大するものと指摘しています。人口の75%以上が地方の村落部で自給自足農業によって生計を立てている一方で、同国の上位20%の富裕層のうち70%以上の人口はディリに集中しています。また、国内で最上位10%の富裕層の収入は最下位の10%の貧困層の14倍以上です。こうした都市と地方の歴然とした収入の格差があるにもかかわらず、政府の支出の40%以上がオエクシの経済特区や道路建設等の大規模インフラ建設に向けられ、教育や医療、農業など貧困層の生活を改善するために使われていないと、現在の財政政策に疑問を投げかけています。



コーヒー二次加工場の機械設置風景

2 コーヒー事業——念願の加工場の完成

2015年のコーヒー事業は、ディリの二次加工場建設で始まりました。ディリ市内の海に近い場所に2,000平方メートルの土地を借り、生産者から買い取ったパーチメントを時間当たり1トンの速さで脱殻、選別できる機械を設置しました。工場建設から機械の設置、配線、運転まで、スタッフにとっては新たな挑戦でした。重たい機械を人力で運ばされたり、機械のスイッチを注文して

いなくて急遽ディリ市内で探したり、苦労が多かった分、完成した際の喜びも一入でした。

ディリの工場建設と並行して6月からはコーヒーの収穫、加工作業も始まる予定でしたが、マウベシのマウベシコーヒー生産者協同組合（COCAMAU = コカマウ）で収穫が始まったのは7月半ばを過ぎてからでした。気候変動の影響を受け収穫が遅れただけでなく、収量も少なく、国際市場価格も下がり気味で、生産者にとっては厳しいシーズンとなりました。それでも COCAMAU は74トンのアラビカパーチメントを、サココのサココ自立組合（KOHAR = コハル）は15トンのロブスタパーチメントを出荷しました。

8月27日に二次加工場の開所式をおこない、9月以降、本格的に工場を稼働させました。投入口にパーチメントを入れると、予洗機、脱殻&研磨機、分別機、比重選別機を通り、最後にサイズ別選別機を通して生豆が出てきます。大掛かりな機械と大量の必要電力を前に右往左往の日々ですが、作業効率は格段に上がり、豆の仕上がり状態もとてもきれいです。工場初年度、よいスタートを切ることができました。

（東ティモール事務所 伊藤淳子）



COCAMAU コーヒー出荷風景

コーヒーの生産者協同組合員数表
コカマウ組合員数

村	集 落	2012		2013		2014		2015	
		組 合 員	準 組 合 員	組 合 員	準 組 合 員	組 合 員	準 組 合 員	組 合 員	準 組 合 員
アイトット村	クロロ	19	26	25	26	27	25	32	25
	マウレフォ	19	16	8	16	11	16	19	16
	ベトゥララ	5	9	5	9	5	9	5	9
	ルスラウ			11		10		11	
マウベシ村	レボテロ	9	13	11	13	16	10	16	10
	リティマ	10	9	11	9	9	9	10	9
マネット村	ルスラウ	7		7		11		11	
	ハヒタリ	15		25		25		25	
	マウライ	36		68		68		64	
	レブルリ	15		24		25		24	
	ケリコリ	22		46		50		47	
マウラウ村	リタ	40		37		43		43	
	ルムルリ	42	23	41	23	44	22	45	22
	ハトゥカデ	24	9	26	9	37	9	39	9
	ハヒマウ					20		20	
エディ村	ロビボ	6	7	7	7	10	7	18	4
	タラレ	33		37		58		54	
	ライメラ			41		46		49	
ファトゥベシ村	テトゥバウリア			7		7		7	
組合員数計		302	112	437	112	522	107	539	104

コハール組合員数

ポニララ村	サココ	44	60	44	60	44	87	44	87
-------	-----	----	----	----	----	----	----	----	----

スタッフ紹介

日本の皆様に美味しいコーヒーをお届けするべく、日々精進しているコーヒー事業担当スタッフをご紹介します。



ネルソン

パルシック勤務歴10年目。コーヒー事業の大黒柱。エルメラ県グレノに自身のコーヒー畑を持ち、将来は地元で農業を営みたいと思っている。ディリ工場を東ティモールのコーヒー発信地にしたい、という夢を持つ。



アカイ

パルシック勤務歴3年目。東部バウカウ県ラガ出身。プロイラー肉を売って学資金を貯め、インドネシアの大学で農産品加工を学んだ。2015年はマウベシでのコーヒー豆の品質管理とディリ工場でのデータ管理を担当。



バルト

パルシック勤務歴2年目。エルメラ県レテフォ出身。コーヒーアカデミー*で森林学を学ぶ、ちょっと熱い男。ディリ工場では機械担当。

*エルメラ県のグレノにあるETICA (East Timor Coffee Academy) という主に農業・森林関連を学ぶ学校。コーヒー産地エルメラの青年たちが多く通っているようです。

ココナッツオイルを作る女性たち



3 農村女性による経済活動支援

2013年度から継続して、東ティモール6県の村落の女性たちが地域の特産品を活用して収入が得られるようにすることを目指す「東ティモール農村女性による経済活動支援」を実施しています。

事業開始から1年半を迎えた女性事業は、各グループの商品の品質改善、新商品の試作、一部商品のディリ市場でのマーケティングを通じて、各グループの生産活動を軌道に乗せることが課題でした。



バージンココナッツオイルの品質改善指導のようす



オイルサーディンの作り方を指導するバウカウ県のエルメリンダさん(中央)

特に品質改善に取り組んだのは、バージンココナッツオイルです。日本で販売されている他国商品と比較し、東ティモール産は甘い香りやココナッツの味が薄いという印象でした。品質改善の課題は新鮮なココヤシの実の選別と、ココナッツミルクから油分を分離させる際の時間、温湿度管理です。時間の管理は比較的容易ですが、温湿度管理は空調設備のない環境では不可能です。発酵部屋というものを建設し、温湿度計とのにらめっこが続いています。

新たに生産の始まった商品に、ピーナッツバター、オイルサーディン、ハイビスカス・ティーがあります。ピーナッツバターは、固いピーナッツをバター状に粉碎できる器具が手に入らず、木臼でつぶす方法をとっています。手作り感があり味は良いですが、油分が分離してしまい固くなるという課題が残っています。オイルサーディンはバウカウ県のグループがイワシ漁獲量の多いボボナロ県アタバエのグループに作り方を教えてくれました。ハイビスカス・ティーは各地でローゼルの試験栽培をおこない、雨季を待って本格栽培を始める予定です。

ハーブティー6種、はちみつ、バージンココナッツオイル、ピーナッツバターをデリの店舗に卸しています。今後も品質改善を重ねて販売と生産を軌道に乗せていきます。

(東ティモール事務所 伊藤淳子、林知美)

(この事業は、JICA草の根技術協力事業パートナー型の支援と皆さまからのご寄付で実施しています。)

女性グループ生産計画

県	グループ名	産品
アイナロ	Hanoi ba Oin	ハーブティー(ツボクサ、ミント、アボカドの葉、ライムの葉、レモングラス、月桃、ハイビスカス)、スパイス(スイートバジル)、蜂蜜、イチゴジャム、テンペ
アイレウ	Feto buka Moris	チップス(キャッサバ、カンナ)
バウカウ	TRM-OCA	チップス(バナナ、ジャックフルーツ)
	FIB	ピーナッツバター、ピーナッツ菓子
	FENA	ハーブティー(ハイビスカス)
	HPL	バージンココナッツオイル、ババイヤジャム
	REWA	ハーブティー(ハイビスカス)、ドライフルーツ、トマトソース
コバリマ	Rammajeleju	サゴヤシでんぶんクッキー、ココナッツクッキー
	Fitun Naroman	ふりかけ
	Feto oan Kiak	トウモロコシ粉の菓子、ふりかけ
	Feto Gronoto	バージンココナッツオイル、ハーブティー(ハイビスカス)、ドライフルーツ
ボボナロ	APAM	ピーナッツバター、蜂蜜、ハーブティー(ハイビスカス)
	Haburas Tari Laran	ピーナッツバター
	Moris Foun	ピーナッツバター
	Masin Atabae	バージンココナッツオイル、オイルサーディン、塩
リキサ	Berumuttuh	バージンココナッツオイル
計	16グループ	

女性事業参加女性の声

フェリシダーテさん

(Feto Gronoto/グループ・ゴロント女性部)



今までは、男性、女性のメンバー関係なく一緒に活動してきましたが、2015年10月に女性部を立ち上げて、組織図、会計簿や活動記録簿を作成し、活動を開始しました。グループの拠点

があるコバリマ県ティロマル郡サレレでは、ココナッツがたくさん実りますが、お菓子や料理の材料として利用するくらいでした。私たちが製作しているバージンココナッツオイルは、母の世代には身近に作られていたもので、料理や美容に使っていたと聞きます。先日初めて首都デリへの販売で収入を得られました。メンバーと話し合い、収益は個人へ分配せず、グループ資金としてプールし、メンバーの子どもの学校資金や小売店運営資金の補助のためのマイクロクレジットを行うことを決めました。



4 循環型農業事業から水事業へ

東ティモール山岳地に適した森林保全型循環型農業のモデル作りを目指して2012年7月から3年間にわたって実施してきた農業事業が、9月に終了しました。

最終年度は、等高線栽培の導入などによる土地肥沃度の改善、養豚飼料作物の多様化、アジアミツバチの蜜源植物の栽培、バイオガスの設置とロケットストーブの導入を行い、森林保全型農業の1モデルを提示することができました。土地肥沃度の改善では、モデル畑で栽培したトウモロコシの収量が平均して約5割増えるなどの成果が見られました。また、アジアミツバチの養蜂では、初めてハチミツを採取することができ、今後の取り組みへの一里塚となりました。

しかし、これら農業事業を実施する過程で、乾期の農業用水はもちろん、人が生きていくために必要不可欠な生活用水の確保が十分でない地域が、マウベシ郡内にもまだ残っていることがわかりました。降雨量は年間2,000mm以上とわりあい豊富ですが、人口増加と居住形態の問題などのため、水不足が深刻な地域があります。この状況に対処するために、外務省のNGO連携無償の資金を得て、2015年10月から「山間部農村の水利改善事業」を3か年計画で実施しています。

初年度は、郡内の2村4集落（ハトゥレテ、タラブーラ、ラカマリカウ、ロビボ集落）で、上水配備計画をコミュニティとともに作り、植林によって水源を保護、水源から集落まで配管・貯水槽づくりを進めています。マウラウ村は、郡内でも有数の水へのアクセスが悪い地域で、村の人口を賄うことができる水源は、谷底にしかありません。ここから、100m超の高さに設置する貯水槽までポンプで水をくみ上げ、各集落に水を送ります。将来、村の子どもたち・孫たちが、2015年に始めた上水事業のおかげで今の発展がある、と振り返ってもらえるような、しっかりした設備にしたいとの思いを込めて事業を始めました。

（マウベシ事務所 高橋茂人）

（この事業は、日本NGO連携無償資金協力と皆さまからのご寄付で実施しています。）



蜂蜜を採取する農家とバルシクスタッフ



バイオガス・プラントの設置の様子



取水槽設置のための砂利を運ぶ地域の小学校の子どもたち

水事業・事業地地図



東ティモールにおける循環型農業への挑戦 —民際協力の現場から、現地スタッフによる報告—

2015年9月5日、農業プロジェクトの現地事業担当者のアデリーノ・カブラルと宮田悠史が循環型農業事業の報告を行いました。二人の報告の後、同事業で専門家として現地で技術指導を行っていただいた有機農業専門家の桑原衛氏からコメントをいただきました。桑原氏からは、「東ティモールに元々ある循環を壊さないように、いかに東ティモールの農村を豊かにできるか」という視点で農村にある循環とその維持についてのお話をいただきました。当日は、東ティモール関係者や循環型農業に関心のある約30名の方々のご来場くださり、活発に質疑応答や意見交換を行いました。



報告会後にティモールの歌を歌うアデリーノ（右）と宮田（左）



植林に参加した中学生



展示会に参加する PIFWANITA



PIFWANITAのジャムを試食する子どもたち



植林に参加した日本の大学生

ペナンでの活動

パルシックは2010年から漁民組織 PIFWA (Penang Inshore Fishermen's Association ペナン浅海漁民福利協会) の植林活動の支援を続けています。近年は、マレーシア国内での植林活動の普及だけでなく、ツアーや大学生への研修プログラムなど、日本人と PIFWA の植林をつなぐ支援にも力を入れています。

1 PIFWAの活動

沿岸漁業を生業とする小漁民が漁場を守るために始めたマングローブ植林活動は、マレーシアで社会的な認知を得てきました。20年間の活動で20万本以上の植林を続けてきたことで PIFWA の事務所のある半島側南西部のスンガイ・アチェ村周辺から北に登る海岸線やペナン島周辺での植林はほぼ完了しています。そのため現在は、植林教育センターを中心に植林活動に関する教育活動にその活動の中心を移しています。2015年度は企業の CSR 活動での植林は通算で年に8回、大学などの教育機関は9回、パルシックのような国際協力 NGO 等の訪問は6回となっています。PIFWA の植林活動は社会的に一定の評価を得て、連邦政府森林局の職員の教育活動や漁業省からは会議への参加などの招請を受けるようになり、これまで無視されがちだった沿岸小漁民を代表して意見を述べる機会も得ています。

2 PIFWANITAの活動

2014年に活動を開始した PIFWANITA は、マングローブ種を使った食品の生産活動を始めました。この活動のために教育センターの一部が改装され、衛生的に食品加工ができる台所が完成しました。ブルンバンという種類のマングローブの実からジャムを、ジュルジュという種類の葉を使ってお茶を生産しています。ムスリムであるマレー系の女性たちが協同して働く場をつくり、その生産物が家計の一助となることを当初の目的として PIFWANITA のプロジェクトは開始されましたが、女性たちが PIFWA とマングローブ植林の活動をする中で環境問題とマングローブを使った製品との関連性を理解し、積極的にマングローブ植林に参加し、リーダーシップをとるようになりました。マングローブ商品は現在、マングローブ植林活動を PR する展示会や植林活動で販売しています。PIFWANITA はマングローブ商品の販路拡大と同時に、マレーシア社会の栄養問題への関心を高めることにも取り組んでいます。マングローブ商品の利点を消費者に理解してもらうためには、まず自らがその重要性を理解し、自分たちや家族の健康管理への意識を高めなければなりません。

(マレーシア事業担当 大塚照代)

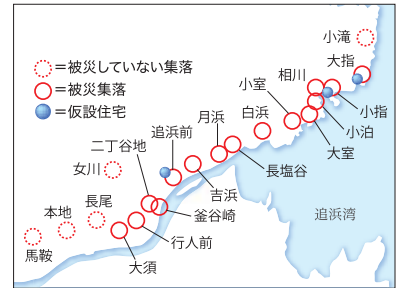
学校プログラム

2015年度から日本の大学生をマレーシアに派遣し、英語とマレーシアの社会や環境問題について学ぶ研修プログラムを開始しました。2015年度は1校から10名の大学生が参加し、4週間ペナンに滞在しました。私たちが現地では体験し魅せられてきた、多民族が織りなす多文化の世界を若い学生さんたちに実感し学んでもらえたことと思います。

(東京事務所 西森光子)

北上復興応援隊の活動

東日本大震災から5年の歳月が経ちました。パルシックは震災直後に緊急救援から始めた後、事業の拠点を宮城県石巻市北上町に置き、地域の漁業復興、仮設暮らしの皆さんへの農業支援を実施してきました。2015年度からは復興応援隊の活動のみに集中し、地域の復興を支援しています。復興応援隊は総務省の事業で、被災3県が市町村と連携して、それぞれの地域の復興に取り組む人材を募って「復興応援隊」を結成し、一定期間地域住民の活動を支援するものです。パルシックは2012年12月に宮城県から事業を受託し、①住宅移転・まちづくりの支援、②かわら版の発行、③子ども支援、④地域のイベントのサポートを行っています。北上町の高台移転が完了する2017年度末まで、復興応援隊事業で住民さんの生活再建を支援していく予定です。2016年3月現在、応援隊活動に取り組む4名の応援隊員をご紹介します。



佐藤尚美 東日本大震災から5年を迎えようとしています。震災当時、私はパートをし、3人の子育てをしながら家族と北上町で暮らしていました。震災で主人がなくなり、その2年後から、北上地域復興応援隊として活動を始め、今年度で活動3年目を終えます。今年度は、主に「地域主体」を意識し、これまでの応援隊の取り組みを住民や地域に落とし込む、その為の受け皿作りを中心に行います。まずは応援隊の後継組織となる「きたかみインボルプ」という若手の住民組織の結成に取り組みました。次の段階として、彼らが継続的に地域で活動出来る基盤創りに取り組んでいます。被災地の住民が望んでいることは、ここで普通に暮らす事。復興とは、外観で測るものではなく、住民の実感からしか生まれないものだと思います。



インボルプの会議の様子

遠藤博明 東京都出身。発災当時、私は建築専攻の大学生でした。春からは大学院に進学し、都市計画等の研究をする予定でいました。そんな時に起きた震災は私の考え方のターニングポイントとなりました。大学院進学後、宮城県石巻市牡鹿町の震災復興に携わる建築家の団体 ArchiAid に学生スタッフとして加わり、2年間はその活動に従事しました。しかし、たった2年で震災復興がなされるわけもなく、活動を続けたいと思った時にいただいた話が復興応援隊でした。支援地を牡鹿町から同じ石巻市の北上町へ移しましたが、大学院時代の経験と建築の知識を活かして、住民さんとの集団移転地計画策定のワークショップを主にお手伝いしています。



集団移転計画のためのワークショップ

復興応援隊員の声

成田昌子 復興応援隊に加わって3年目となりました。私は北上地区の隣の地区の出身で、私自身も被災しました。同じ被災者目線で一緒に考えて活動していけたらと思い、応募したことがこの仕事を始めたきっかけです。今年度の活動としては地域イベントの開催支援や地域向け広報誌「北上かわらばん」の取材、小学生対象の遠足や住民主体のまちづくりのワークショップ参加のほか、デイサービスへヒアリングに伺い昔の暮らし方や震災時の様子などを教えていただき、今後の課題は何かを探ってきました。今まで以上に様々な活動や地域の方と関わることとなり、より良い経験となりました。



デイサービスでのヒアリングの様子

東晶子 千葉県館山市生まれ。2015年11月に復興応援隊として活動を始めました。海外での活動に目を向けていたところを、知人から「海外ではなく日本で抱えている震災や高齢化、過疎化などの問題をもないがしろにはいけないのではないか」との助言を受けて、復興応援隊として活動することを決めました。赴任して以降、「まずは地域を知ること」をモットーに月刊のかわら版の制作を行っています。地域によそ者の私が入り込んでいくには、共同作業に加わせていただくのがいいのではないかと考え、浜の仕事の手伝いや地域の行事に暇さえあれば参加しています。繰り返し足を運ぶことで「また来ての？」と声をかけてくれる方も。住民の方に少しでも顔を覚えていただけていると実感しています。



浜での作業を取材

2015年度のフェアトレード活動

パルシックはフェアトレードを、地球の各地に暮らす人びとが、対等・平等に生きることのできる社会を作り上げるためのプロセスと考えています。2015年度は品質の高いコーヒー、リピーターが増えているアールグレイ紅茶を中心に営業活動を行いました。広報と連携し、企業のCSR部門へのアプローチ、オーガニック EXPO等の企業間取引 BtoB (Business to Business) を意識した商品紹介、学生や生協の組合員さんへの「パルシックのフェアトレード」の紹介にも力を入れました。(東京事務所 ロバーツ圭子)



■カフェ・ティモール

昨年度(2014年度)産は、口の中にしっかりと苦みとコクが広がり、甘くて優しい後味のつづく、カフェ・ティモールらしさを取り戻した品質の高いコーヒーが届きました。コカマウ(組合)全体のコーヒーの中でも特に特徴あるもの、丁寧に作られた生豆を集落ごとに分けて管理・販売したところ、『ハヒマウコーヒー』、『ヴィトリーノさんのコーヒー』などと取引先の方が命名してくださり、多くの方に親しんでいただきました。前年度と比較し売上は、小売が15%、卸が18%増となりました。



■アールグレイ紅茶

2013年に販売開始後から3年が経ち、パルシックの人気商品の1つとなっています。個人のリピーターのお客様や取引先の生協での注文数が増えています。包材の不備、賞味期限の設定の仕方など、課題にぶつかっては、産地と共有して改良を重ねています。2月の展示会「オーガニック EXPO」では、茶葉をディスプレイして香りの高さや、茶葉の大きさを紹介して好評でした。スーパー等小売店への販路拡大ができていないのが課題です。小売は前年比19%増、卸は大口の販売もあり382%増でした。

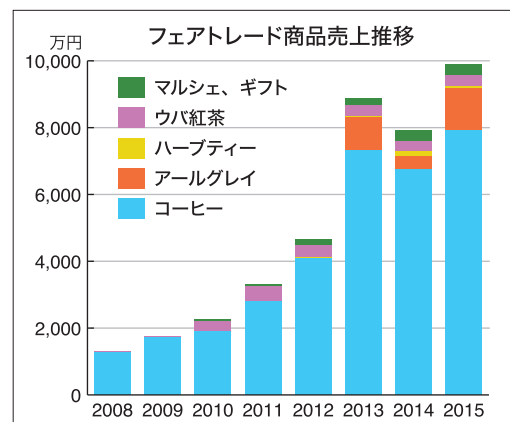


■ウバ紅茶

パルシックのロングラン商品のウバ紅茶は、紅茶好きの方に好まれ、生協さん、個人のお客様を中心に安定した人気を博しています。売上は前年比20%増、卸は昨年とほぼ横ばいとなりました。

■アロマ・ティモール

手作業での加工や、東ティモールの自然の中で育ったハーブという特長を活かし、少しずつ人気広がっています。特に、新商品の「レモングラス」と「月桃」はハーブとして一般的によく知られていることもあり、発売開始からまもなく人気商品となりました。しかし、全体の入荷数量が少なかったために12月には完売の商品が出たり、賞味期限が短いため卸販売を休止せざるをえなかったりしました。また、主な販路として狙いを定めているバルクでの販売先についても新規の顧客獲得はできませんでした。これらの理由で販売量が減少しましたが、それでも小売りの売上は増えて前年比30%増でしたが、卸は原料としての販売ができず前年の4分の1に減りました。



2015年度の広報の取り組み

2015年度は、パルシック独自の広報ツールを活用しながら、新聞・雑誌などのメディアや外部の広報支援ツール、講師活動を通じて、さらなる支援者の拡大へとつなげました。

■ Webサイトのリニューアルと Facebookの活用

事業地が増えてきたことを受け、Webサイトを事業地ごとに事業概要や進捗状況が見られる構造へリニューアルしました。現地からの情報発信を強化し、世の中の関心が高まっているパレスチナガザ地区やシリア難民への支援の呼びかけを行いました。また、海外からのアクセスの増加に伴い、英語サイトの充実を図りました。

Facebookは全スタッフが情報発信のために活用し、訪れることが難しいガザ地区内での支援状況や、スリランカのリサイクルサーー商品の新作紹介など、現場の写真を添えていち早くリアルな情報をお届けしました。

■ 主催イベント

2015年度は、パルシックが独自に主催するイベントの多い1年となりました。5月に開催の政権交代後のスリランカを考える集会からはじまり、明治学院大学のボランティアプログラムでの共催イベント、東ティモール人スタッフのアデリーノが来日した農業事業の報告会、スリランカの紅茶事業の報告会を開催しました。各会とも参加者は定員に達する大盛況で、ワークショップスタイルを取り入れながら積極的に意見交換を行いました。

- 2015.05.15 2015年のスリランカ 政局、人権、民族融和について@連合会館
- 2015.07.04 明治学院大学×パルシック FAIR TRADE FOR THE FUTURE ~あなたと考えるフェアトレード~@Shibaura house
- 2015.09.05 東ティモールにおける循環型農業への挑戦@連合会館
- 2016.03.19 スリランカ おいしい紅茶の探索研究~飲む・食べる・しゃべる~@ワテラスコモンホール

■ セミナーでの講師

各地のイベントに講師として参加しました。パルシックが主催するイベントではどうしても既存の支援者ばかりの集まりになりがちですが、他団体に招かれることで、新たな層の人びととの出会いがありました。事業地の歴史や現状、パルシックの活動について知っていただくための実りある機会となりました。

- 2015.11.21 フェアトレードコーヒーと東ティモール 10年の歩み@ほっかいどうピーストレード
- 2015.11.29 コーヒーとフェアトレード~東ティモールの事例@名古屋生活クラブ
- 2015.11.29 おいしいコーヒー入門講座@清澄白河
- 2015.12.03 国際NGOにおけるリーダーシップと管理マネジメント@埼玉大学
- 2016.01.20 気軽にトークカフェ 美味しいコーヒーとフェアトレード@JICA 地球ひろば など

■ 企業CSR活動への参加

企業のCSR活動の一環として、数社よりお声掛けいただき、お昼休みを利用した社内食堂での販売を行いました。従業員の方への販売は、イベントに興味があって自発的に会場へ来るお客様だけでなく、NGOの活動やフェアトレードに興味のない方へもアプローチできる良い機会です。まずは、パルシックの商品を試飲してもらい、おいしさを伝えることから始めました。企業とともに活動を継続して、商品の背景やフェアトレードの仕組みを伝え、世間に広く



構造を一新した Web サイト



明治学院大学との共催イベントでのワークショップ風景



仕事帰り、学校帰りに、「気軽にトークカフェ」に多くの方が足を運んでくださいました。



(株)リコー社会貢献クラブ Free Will「買う!知る!ボランティア」活動で社内販売を実施



高円寺 座の市でコーヒーを中心に、焙煎デモをしながら販売



試飲用にコーヒー、紅茶を淹れ、良い香りで来客者を誘う。エコプロダクツ展にて



JICA広報誌「mundi」2015年11月号



TOKYO LOCAL PEOPLEに掲載

深く浸透していくことを目指します。

■ イベント出店とボランティア

エコや有機食材、国際協力をテーマとしたイベントや、地域密着型のマルシェなどに出店し、主にフェアトレード商品をPRしました。2015年度はイベントを担当するインターンを1人配置し、パルシックの理念や目的に沿ったイベントの選定から、毎回の目標設定、細かな効果測定を行いました。イベント出店は、人数に限りのあるスタッフだけでは手が回らず、多くのボランティアさんにご活躍いただきました。特に、マーケティングボランティアチームは、3回の事前勉強会を経てから1年間活動する、一段ハードルの高いボランティア活動です。チームには、営業や販売業務の経験者からマーケティング研究者まで幅広い分野の方々が参加されており、アイデアを出しあいながら取り組みました。

2015年度 出店イベント	2015年	4月 18、19日	アーステイ東京
		5月 9日	フェアトレードマルシェ
		6月 28日	恵比寿マルシェ
		9月 19日	高円寺 座の市
		10月 1日	築地本願寺カンタ!ティモール上映会
		10月 2、3日	グローバルフェスタ
		11月 1日	土と平和の祭典
	2016年	1月 16日	高円寺 座の市 など

■ オーガニック EXPO、エコプロダクツへの出展

フェアトレードの商品を広めるためには B to B (Business-to-Business) へのアプローチが大事だと判断し、オーガニック EXPO (2016年2月10日 - 12日、東京ビッグサイトにて) へ出展しました。スーパー等の小売店バイヤー、原料としてコーヒーや紅茶を探している方へPRをしました。期間中に約400名の方にブースで試飲をしていただきました。一方で、B to C (Business to Consumer) のアプローチは直接パルシックの商品のファンを増やす機会と位置づけ、エコプロダクツ展 (2015年12月10日 - 12日、東京ビッグサイトにて) へ出展し、環境問題等に関心のある方を中心に商品の魅力を伝えました。

■ 雑誌・新聞での紹介

国際協力とフェアトレードの取り組みについて、機関誌や新聞、ネットニュースなど、様々なメディアで取り上げられました。スリランカでの紅茶の有機転換事業や、東ティモールでコーヒー事業に携わる伊藤淳子の暮らしが紹介され、活動の認知度向上へと繋がるとともに、フェアトレード商品の新規購入者も増加しました。

■ 淡路町マルシェ

東京事務所の一角にオープンして3年半が経ちました。毎日、いろんなお客様が来られます。毎週、わんぱっく野菜の有精卵を買いに来るついでに、お孫さんにワッフルやチョコなどあれこれ買っていくおじいちゃん。ランチ後いつも1本だけニンジンジュースを買っていきサラリーマンのお兄さん。たまたま通りかかったというおばあちゃんやサラリーマンのおじさんは、試しに、とパルシックの紅茶やコーヒーを手に取ります。

■ 国際協力ニュース

毎年6月と12月の年2回、事業地の状況やパルシックの活動に関する進捗状況をまとめたニュースレター「国際協力ニュース」を、会員、寄付者、フェアトレード商品の購入者の方々等へお届けしました。

人と暮らしに出会う旅 ～パルシックのスタディツアー 2015～

2015年度は、東ティモール、スリランカ南部、マレーシアの3本のスタディツアーを開催しました。これまでに参加して下さった方々から、「個人旅行や他のツアーでは行けないようなところにも行けて貴重な体験ができる」とのご評価をいただいております。地域を変えて何度もパルシックのスタディツアーに参加して下さるリピーターの方が増えてきています。今年度ご参加くださったみなさまの声を一部ご紹介します。

東ティモール

美味しいコーヒーに出会う旅

(2015年7月31日～8月7日)

まるで遊園地のアトラクションのようなアップダウン、土埃こりの中、道なき道を4WDに揺られて着いた先には、貧しいけれど、穏やかな人びとが平和に暮らす集落がありました。はだして走り回る子供たちの澄んだ瞳を見ていると、物質的に恵まれた日本の子ども達より幸せかも、と思ってしまうました。今、日本で私が出来る事。手探り状態ですが、ティモールの人びとの生活が豊かになるお手伝いが出来たらと思っています。(名女川由利さん)



朝の散歩で出会った珍しい鳥



スリランカ

おいしい紅茶のルーツを訪ねる旅

(2015年8月16日～8月23日)

私は、農村開発を通じた国際協力に興味があり参加しました。森林保護区周辺の散歩など、自然を満喫できる旅程も大きな魅力でした。急斜面に広がる有機栽培の畑には、様々な植物が混植され、持続可能でバランスの取れたシステムが確立されていました。有機栽培は、生産方法が生産者にとって搾取でないこと自体が健全なことなのだと感じられる旅でした。ホームステイでは、子どもと指さし会話帳を使いながら、楽しい時間を過ごしました。(廣田沙陽子さん)

マレーシア・ペナン

沿岸小漁民とともにマングローブを植える旅

(2015年12月26日～30日)

マレーシアでは、マレー系中国系インド系の人たちが大多数で、その人たちはそれぞれ別の習慣、宗教、食べ物、があって、それが小さな地域でも色鮮やかなモザイクのように混在しています。ですから一日の中でも会う人ごとに、違う習慣を相手が持っていることを頭に入れて付き合っているようです。「多民族国家」と一言の、多くの内容を体験できたのは初めてでした。最後に女性活動家サラスさん、「政権取ることよりも人々のために働くことが重要、」と、からりとって働いている人。私に近い年齢とおもわれる、私もまだすることがある、彼女みたいに、からりと笑って働こう。(桃井美鈴さん)





- 地下鉄 A5 出口から徒歩 2 分
都営新宿線・小川町/丸ノ内線・淡路町/千代田線・新御茶ノ水
※いずれの駅も地下でつながっています。
- JR・御茶ノ水駅、聖橋口から徒歩 6 分

特定非営利活動法人 パルシック



〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11 東洋ビル

Tel : 03-3253-8990 Fax : 03-6206-8906

Email : office@parcic.org

Web : http://www.parcic.org

Twitter : http://twitter.com/parcic_office

Facebook : http://www.facebook.com/parcic